

みやん だね

新林(宮嶋)窯址の調査報告

—東備西播有料道路建設に伴う—

1974・3

邑 久 町 教 育 委 員 会
東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会

前　　言

岡山県南新産業都市と播磨工業整備特別地域を結ぶ産業開発沿線の観光開発を狙う、東備西播開発有料道路は、国営事業として県開発公社によって計画がなされ、工事も着々と進められております。

一方、こうした開発から文化財を保護することも、祖先からの伝承を受けついで今日ある私たちにとって大切な責務であります。

については、去る 1972 年に同建設区域の埋蔵文化財分布調査を実施したわけであります。これに引き続き尻海新林（宮崎）の窯跡の発掘調査を実施いたしました。その概要をとりまとめることができ、文化財顧影のご参考となれば、幸甚と存じます。

この調査や刊行にあたりまして考古学研究者、県文化課、県開発公社、調査委員会、地元関係者等のご指導、ご協力に対して心からお礼を申しあげます。

昭和 49 年 3 月

邑久都邑久町教育委員会

教育長 大 森 勝

例　　言

- この報告は東備西播有料道路建設に伴い、邑久町（東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会）が岡山県道路公社の委嘱を受けて実施した発掘調査の要である。
- 熱残留磁器の測定にあたっては、福井大学教育学部、広岡公夫先生の手をわざらわした。
- 発掘調査は、東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会が主体となり、邑久町文化財保護委員、川崎務、県教育委員会文化課文化財保護主事　伊藤晃が現場を担当し、終始元玉津公民館長、心光敏一、現館長神坂久吾、千種昇、奥谷一郎、三浦文治をはじめ、時実黙水、岡山市教育委員会文化課出宮徳尚、根木修、県教委文化課、岡本明朗、柳瀬昭彦、大谷猛、樋口啓子、備前市・小西通雄、学生、竹田勝、安川豊史等の援助を受けた。

・ 東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会規約および同委員会委員名簿

（名称及び設置目的）

第1条　邑久町事業地内における埋蔵文化財の調査業務を行なう目的として、東備西播道埋蔵文化財調査委員会を設置し、併せて同調査事業の円滑な運営をはかる。

（組織及び事務局の所在地）

第2条　この委員会は県及び町教育委員会、文化財保護委員、学識経験者、その他関係者をもって組織し、事務を処理するため、事務所を邑久町教育委員会におく。

（役　　員）

第3条　この委員会には次の役員を置く。

委　　員　　長	1　名
副　　委　　員　　長	1　名
委　　員	若干名
幹　　事	2　名
監　　事	2　名

- 委員長は委員会を総理し、委員会を代表する。
- 副委員長は委員長事故あるときは、委員長の職務を代行する。
- 委員は委員会の運営にあたる。
- 幹事は委員会の事務を担当する。
- 監事はこの会の会計を監査する。

(事業内容)

第4条 委員会は第1条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

- ・遺跡地について精査し、遺跡の種別、規模、性格など重要性を確認する。
- ・遺跡調査記録を作成する。

(調査)

第5条 委員会は調査の実施にあたっては、別に調査団を編成して実施する。

(解散)

第6条 委員長は委員会の事業目的が達成されたと認めたとき委員の同意を得て、委員会を解散する。

附 則

この規約は昭和48年8月31日から施行する。

東備西播道埋蔵文化財包蔵地調査委員会委員名簿

氏名	役職
委員長 大森 勝	邑久町教育長
委員 岡田 政敏	県教育次長(文化課長)
〃 家野 富太	邑久町文化財保護委員
〃 川崎 務	〃
〃 太田 嶽	〃
〃 山佐 肇 章	〃
〃 谷祐 道	〃
〃 黒原 菲	町教委庶務課長
幹事 岡本 明朗	県文化課第二係長
〃 木下 智士	社会教育主事
監事 馬場 良策	邑久町議會議員
〃 清水 雄	邑久町役場開発課長

目 次

前 言

例 言

第1章 調査 経緯.....	8
第2章 烟址の位置とその概略.....	9
第3章 出 土 遺 物.....	9
第4章 まとめにかえて.....	17



塞址遠景



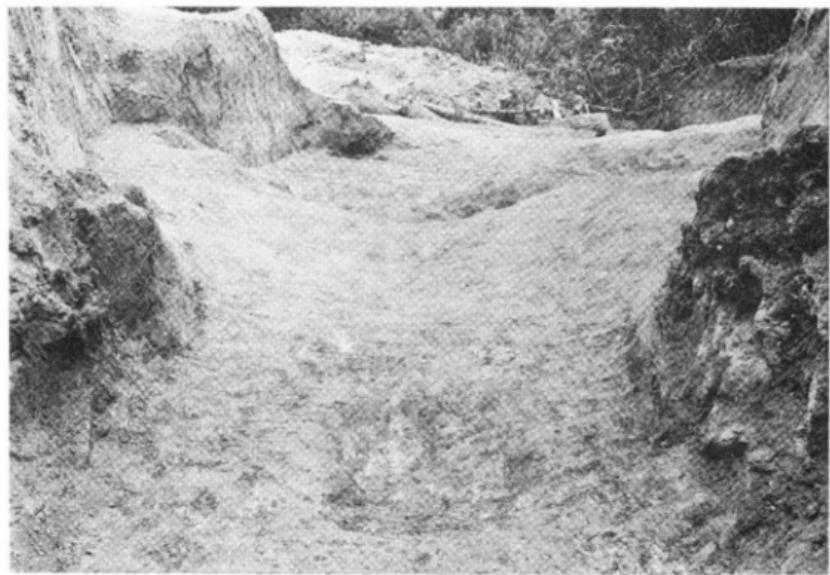
墓址前庭部



墓址近景



窓 内



窓内から焚口部を見る

第1章 調査経緯

1970(昭・45)年岡山県開発公社によって計画された東備西播有料道路は日生町から岡山市西大寺地区まで延長38kmで国道2号線と結ばれる沿線の産業・観光開発を図るために計画されたものである。このため、岡山県教育委員会は昭和46年度に沿線各市町、遺跡保護調査團の協力を受けて予定路線の分布調査を実施し、報告した(註一①)。また、その結果を岡山県道路公社に提出し、埋蔵文化財包蔵地をさけて設計すべく要望してきたのである。

しかし邑久町においては新林古窯址(宮崎古窯址)(註一②)、更谷古窯址(註一③)、潤徳・仁生田遺跡(註一④)が予定路線にかかり、邑久町が調査を進めることになった。このため邑久町は(東備西播開発有料道路)邑久町埋蔵文化財包蔵地調査委員会を設置し岡山県道路公社の委託を受け事業を進めてきた。

1973(昭・48)年8月31日から実施し、約1ヶ月かけて調査を終了した宮崎古窯址の発掘調査の概要である。

- 8. 13 打ち合わせ会議
- 8. 31 現地調査開始、草刈り、トレントレンチ設定
- 9. 1 南北トレントチ北端(上段池上)で須恵器片多数混入、窯盤片は表土下1m前後からも出る。
- 9. 6 南北トレントチ南端で灰層の末端露出、本体確認できず。
- 9. 7 灰層の拡がりはつかめたが依然として窯本体つかめず。
- 9. 8 灰層を掘り進める。池の盛土が1m以上かぶり、全員ダウンぎみ。須恵器も塩袋に5~6個出土
- 9. 12 ずっと灰層掘り、邑久町長他来跡
やっと窯本体チラット出現、池の盛土は1.5m
以上にもなりそうである。
- 9. 16 窯本体を上から追う。土量に圧倒される。
- 9. 19 両側壁確認、主軸決定。幅2m以上、長さ10mを越えるようである。
- 9. 22 小雨決行、窯中央部から陶棺出土蓋だけか。
- 9. 24 秋分の日、助け人多くきたる(柳瀬・大谷・根木)ほぼ全容である。
- 9. 25 焙口付近から灰層にかけて掘り進める。
- 9. 26 邑久町婦人学級来跡(40~50名程)
- 9. 28 窯体内清掃、前庭部埋土除去、一部写真

9. 29 前庭部埋土除去、県調査員見学
 10. 1 写 真
 10. 2 割付、実測開始（柳瀬・大谷・稻口——助人）
 10. 3 前庭部灰層掘り
 10. 4 全景写真撮影
 10. 5 断面くっさつ。全く硬い。フルハシでも歯がたたず。
 10. 福井大学、広岡講師、熱残留磁機測定のため来訪願う。
 現場調査終了
 10. 8 邑久町公民館にて出土遺物の水洗い。
 10. 10

第2章 邑久古窯址群の概略

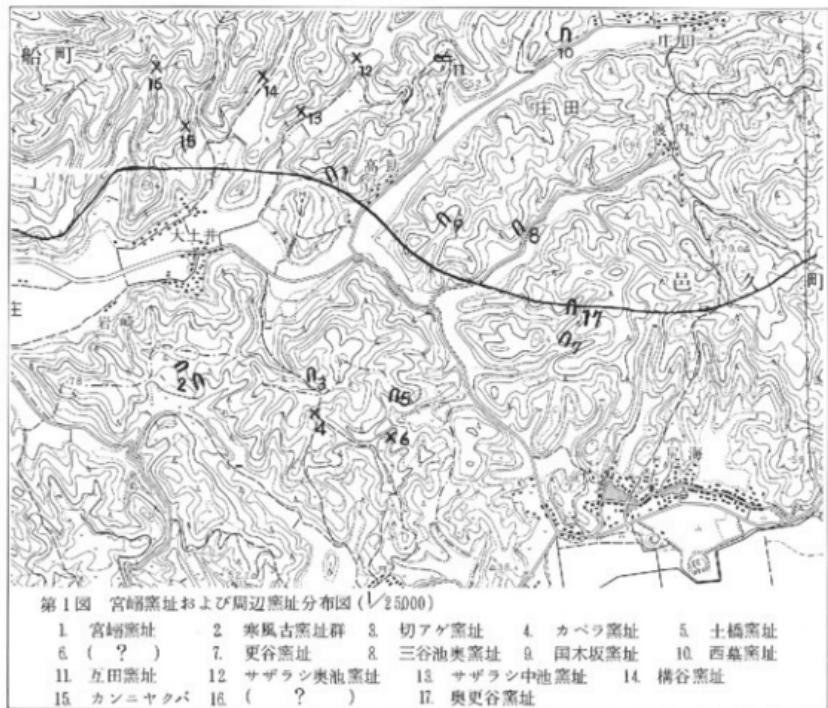
吉井川河口に近い邑久郡牛窓町、邑久町、長船町、備前市にまたがる広い丘陵地帯に分布する古窯址は、時実黒氏をはじめとし、先学によって分布状況が綿密に調査され(註-⑤)、古墳時代～平安時代の須恵器を中心として初期備前焼の窯址を含めて約50基前後の古窯址が確認され、その概要を詳しく報告されている。これらの出土品をもとに西川宏・間壁忠彦氏等によって編年も試みられている(註- 6)。

今回報告する宮崎古窯址もそのうちの一基であり、時実氏によって宮崎古窯址と呼ばれ、多くの出土遺物は、時実氏および邑久考古館に保存、展示されている。

第3章 宮崎窯址

第1節 窯址の位置

吉井川によってつくられたデルタ千町平野を東進すると北と東に大きな谷がありこみ1つは旧美和村に入りこみ、西須恵、東須恵と呼ばれる地名が残っている。1つは虫明あるいは尻海に通ずる街道が谷に沿って走る。虫明、尻海に別れる分岐点に10数戸の高助部落が存する。高助部落入口から北に向って小支谷が入りこんでいる。西方の丘陵（丘陵上には八幡神社が存する。）との間にその谷奥で更に小さく二つに谷が分かれている。この二つの小さな谷にはさまれた突端にこの窯址が築かれている。旧街道がこの付近を通り西方丘陵上に存する八幡神社があり、お宮さんの裏の峠ということから、この付近は宮崎(みやんざわ)と呼ばれている。この谷を利用して、江戸時代頃に築



かれた農業用溜池が上段・下段2ヶ所にある。この両方の溜池に須恵器片、焼壁片等が数多く散布していた。

この窯址周辺は上段の池の底ざらえ等のため土盛りがなされたり、つい最近までゴミ捨て場などに利用され改変されており、地形図(第2図)の21mから19mは池の底ざらいのためにもりあげられたものである。

第2節 窯址の構造

窯体焚口からほとんど残存していたが、煙り出しの部分の一部が路線外で調査を行わなかった。全長は推定約12m前後で、焚口幅1m80cm、焼成室最大床幅2.2mを測る。推定高1.6m以上ありドーム状になっていたと考えられる。

床の傾斜は焚口部ではほとんど見られず、むしろわずかに下りぎみで傾斜変換部に至り、焼成室は20度前後の傾斜で煙り出しにいたっている。床面は少なくとも2面みられた。最終床面からは第Ⅲ類の土器群がまた床内部からは第Ⅰ類の土器が出土している。焚口部床面および両側壁は余り焼

けていないが、3mいった所では表面がガラス状に溶けている。焚口から3mの所で50cm×40cmの深い凹みがみられる。また両側壁面の焚口周辺では地山の岩石をそのまま利用し、焼成室の一番多い所焚口から8m付近では5回のはりかえ、うわぬりが観察でき、この中にはわらと思われるスサが入れられて、手で塗りこんだ痕跡や甕腹片を壁にはめこんでいるのが見られた。

現存している両側壁の約0.5~1mまでの外側の地山は花崗岩で、焚口のしばり口から拡がる付近の両側壁および輝突下約2m前後まではそのまま岩を床面としている。

前庭部は斜面を利用してわずかに掘りこんでいる。前庭部灰層内からの出土遺物は少なく、炭化物層である。

灰層は前庭部から下方斜面に拡がり、上段の池にもその包含層が、下段の池にも末端がのびている。厚い所では1m近くに達する所もある。

路線内はほぼ完掘したが、上段の池の堤防下は行なっていない。灰層上部に幅30cm、長さ3m程の溝状の遺構がみられたが、何に利用されていたかは定かでない。

第3節 出土遺物

窯体内および灰層から各種の須恵器はもちろん、陶棺片、鶴尾片等が出土している。

1) 陶 棺

陶棺の蓋の破片が窯体内から出土している。長軸の長さは不明である。短軸内幅48cm、外幅65cm、高さ26cmを測る。天井部がこれ以上:のびなければ方形の骨蔵器的なものになるのかも知れない。天井部には細い格子状叩きを残し、屋根部分は笠で丁寧に削っている。

2) 鶴 尾

鶴尾のひれと思われる小破片である。これと同一個体と思われるものが、分布調査時にも一片採集しているし、これと同形態の破片が、寒風古窯址群出土品に見られる(註一7)。単弁が二弁残り、上に行く程少し小さくなっているようである。弁および周辺を笠で削り出している。厚さは4cmを測る。

鶴尾片は他にも寒風古窯址群から多くの破片が出土している。

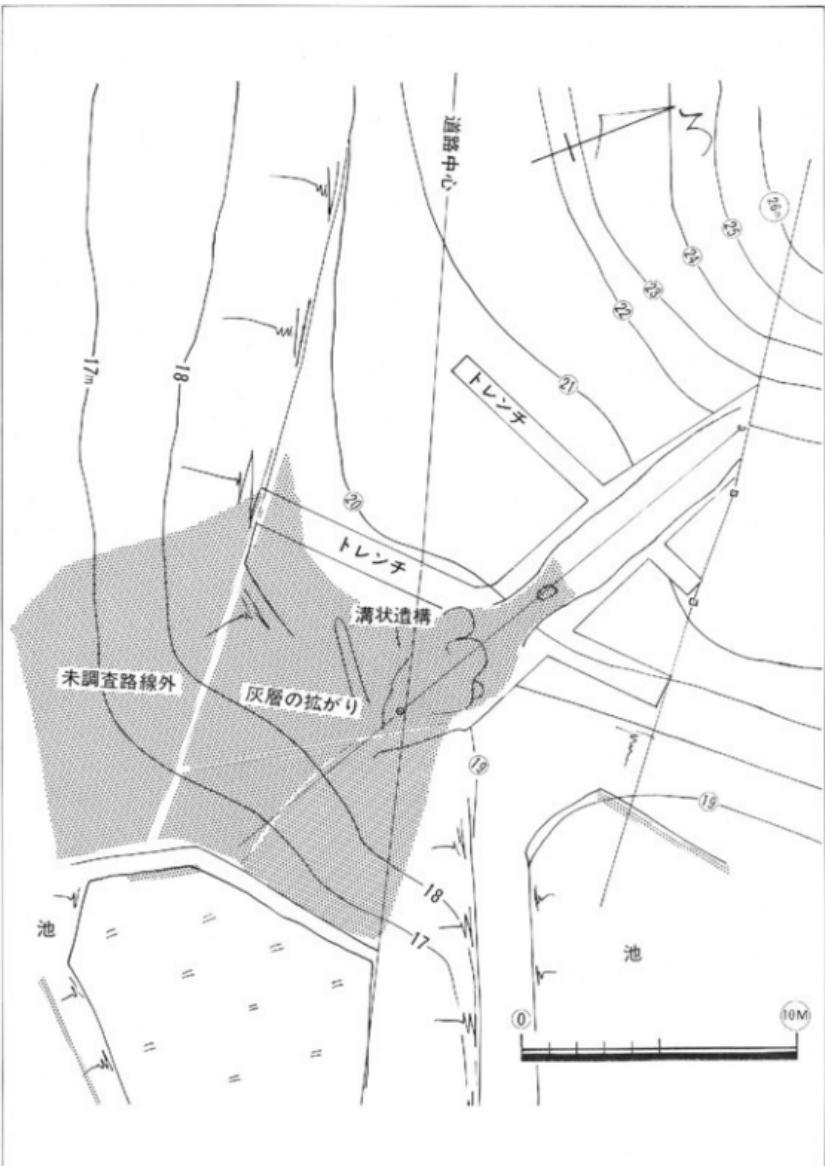
3) 須 恵 器

窯体内および灰層から甕腹片を中心に多量の須恵器片が出土している。

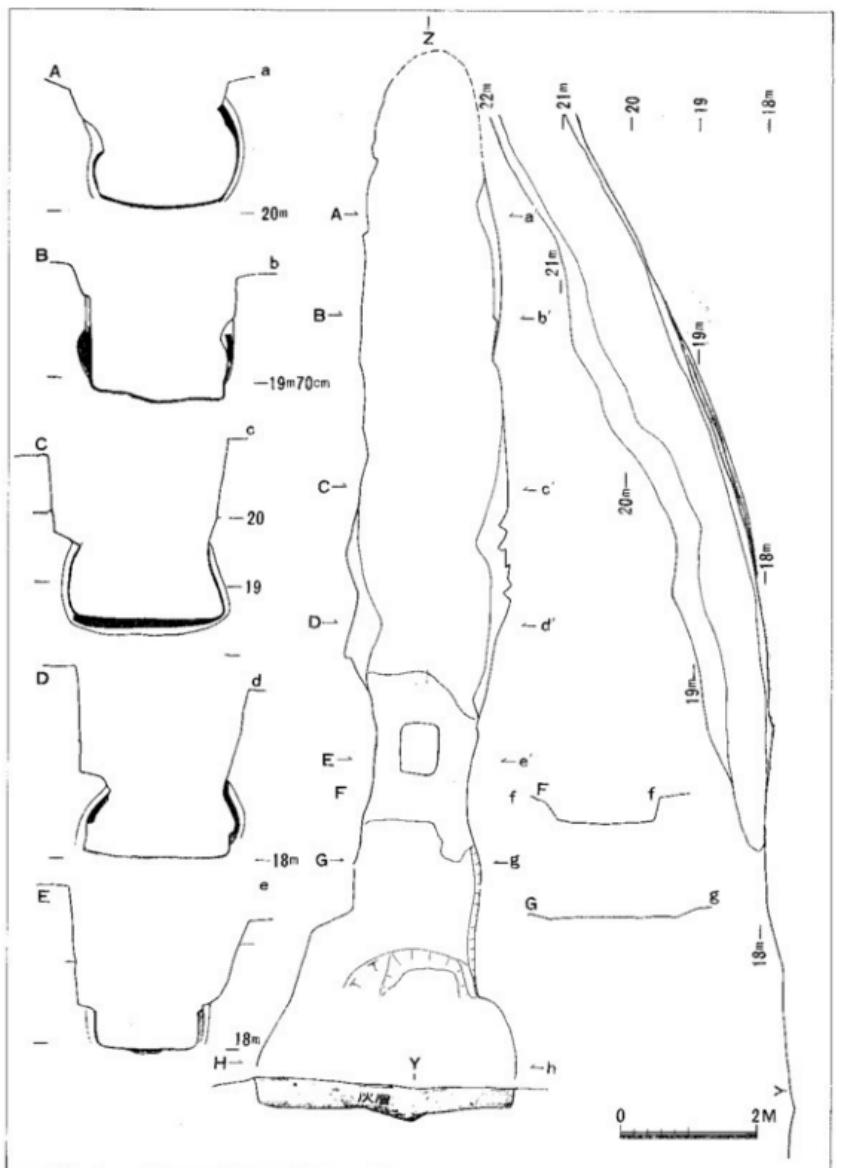
杯だけでいえば少なくとも三つのタイプが見られるが、他の器形からこれらに伴うものと抽出することはほとんどできない。

(第1類) 1~6の口径10~14cmを測り、杯は天井部をわずかに笠削りを行なっている。

7~12は1~6に伴う杯身で口径は9~11cmを測る。受部を持ちわずかに内傾する立ちあがりを持つ。



第2図 宮崎塚址地形図(縮尺1/200)



第3図 宮崎塚址平面図および断面図(縮尺1/80)

(第2類) 13~18は、宝珠つまみを持ち、内面に返りを持つ。小型で口縁端部で直径10cm前後
返りの部分で7.5~8.5cmをはかる。

19~20はこれらの杯身になるのか、あるいは、葵茎の茎になるものかも知れない。

(第3類) 21~23は、大型のもので宝珠つまみ、内面に返りをもつ。

24~30は、偏平なつまみを持ち、口縁端部は逆三角形に折り返している。

31~34は高台を持つもので、口径は大小あり、画一的ではない。

35は平瓶の口縁部、37は鷺の破片である。

37~39は高杯で、37は小型で短い脚柱部を持つ。

38~39は杯部は皿状あるいは塊状になり、脚柱部に1~2本の沈線を持つ。

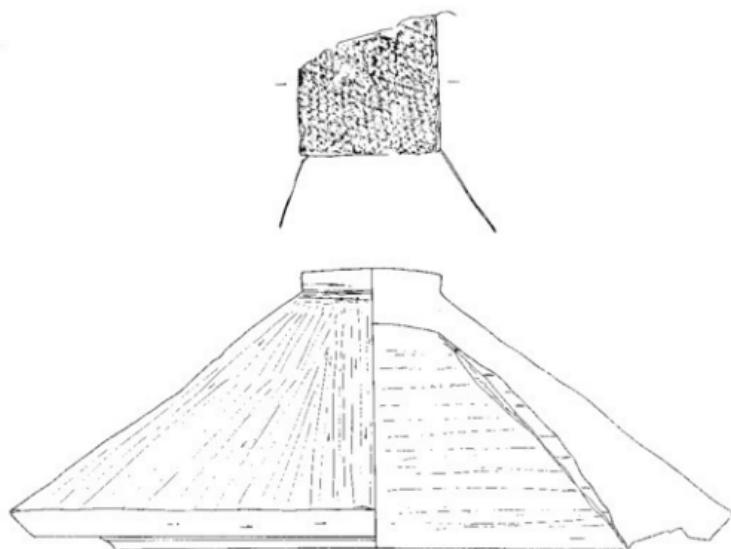
43~45は口径10~12cmの小型の甕で、ほぼ垂直にあがる口縁部を持つ。外面は刷毛、内面は青海波叩きを持つ。

46は口径17cmで少しだ大きい。

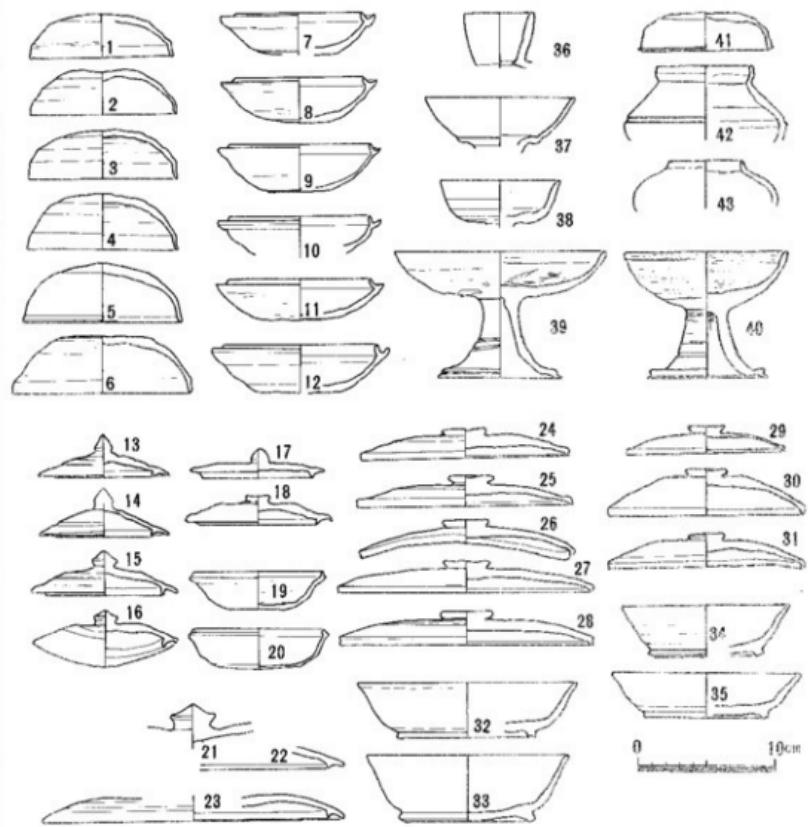
47は肩部に取手を持つが、43~46程肩がはらない。

48~49は「く」の字状に開く口縁部を持つ中型の甕である。

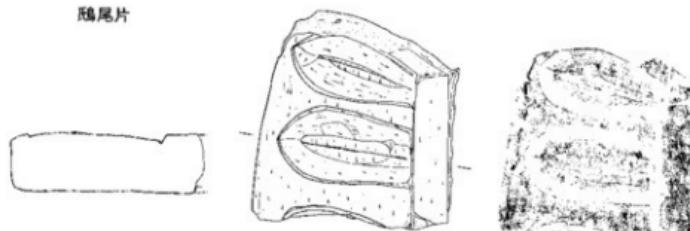
50は口径40cmを測り、大型の甕で口縁部は外反して13cmと高い。



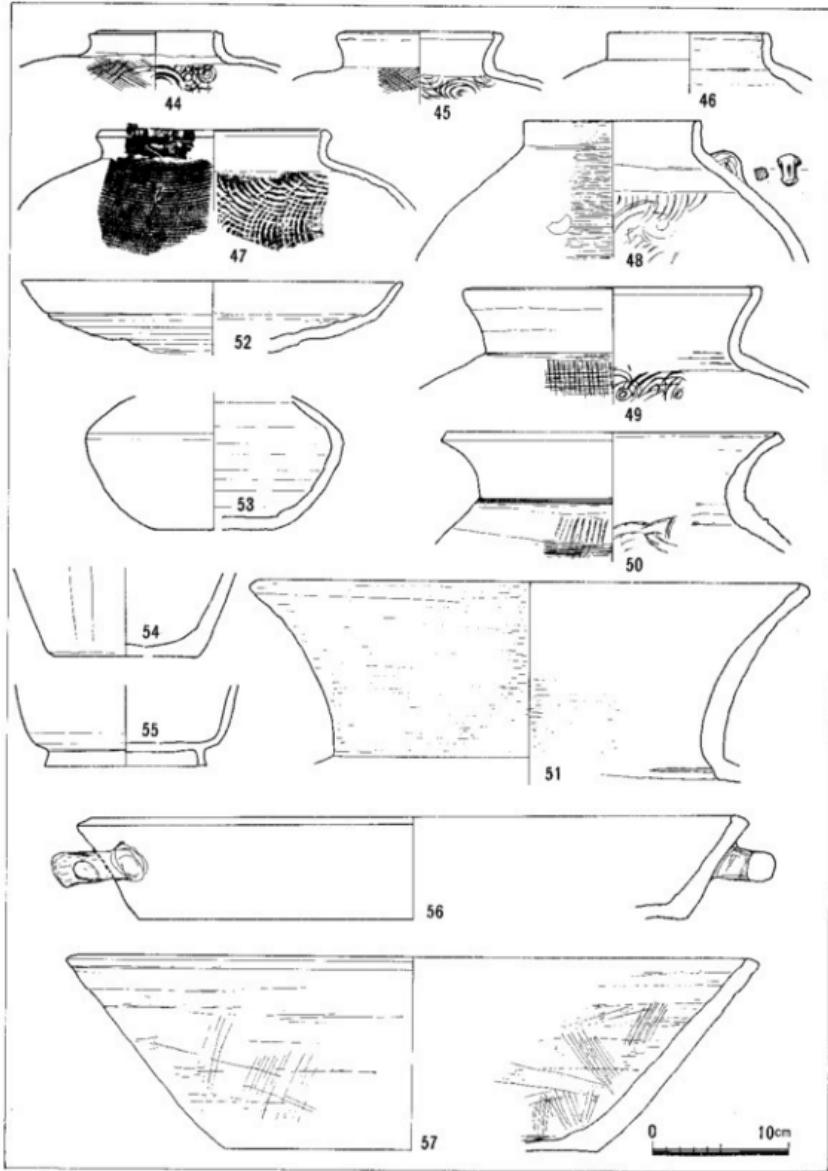
第4図 陶棺型土器(縮尺 1/6)



鷦尾片



第5図 宮燈窯址出土遺物



第6図 宮崎塗址出土遺物

口径はひざんで計れないが、これより大型で口縁部に櫛描沈線を外面全面に施しているものもある。

55は両側に把手を持つ。口径48cm、高さ7.5cmを測り、盤状になる。第Ⅲ類の杯とともに最終床面から出土している。

56は鉢状になる土器で口径50cm、高さ14cmを測る。後に出現するすり鉢状の形態と似ている。胎土は、両者とも明るい灰色で余り砂粒を含まない。

第4章 まとめにかえて

以上宮崎窯を概略的に述べてきたが、窯址の出土遺物等から見て、ある程度時代をおさえることができる。これまで邑久古窯址群の出土遺物による編年は、先にも少し述べたが、西川氏等によつて行なわれている(註-8)。邑久古窯址群の中で最も古いものはアマズク窯址等で6世紀中葉のものといわれている。5世紀末から6世紀初頭の窯址は現在の所発見されていない。

6世紀から7世紀以降の窯址は数を増し、周辺各所に点在している。

宮崎窯址の第Ⅰ類にあげた須恵器杯身はわずかに内傾する立ちあがりを持ち、亀ヶ原1号窯に類似する。これらは備中二子御堂奥窯址からも出土しているが、瓦は伴っていない(註-9)。

第Ⅱ類に取りあげたものは、宝珠つまみを持ち、内面に返りを持っており、寒風1、2号窯と類似する。また第Ⅲ類にあげたものは杯蓋に偏平なつまみ、杯身には高台を有し、寒風3号窯と同一時期と考えられる。

鷦尾、陶棺は第Ⅲ類以降に、55、56の鉢類は第Ⅳ類に伴うものであろう。

それではこれらを畿内の先進的須恵器生産地である大阪府陶邑古窯址群(註-10)等と比較して見るとどうであろうか。杯蓋に宝珠つまみをもち内面に返りのあるものの出現は第Ⅲ期(TK-217)からであり、杯身がわずかに内傾する立ちあがりを持つ宮崎窯の第Ⅰ類と第Ⅱ類にあげたものが共伴している。

また藤原京では第Ⅲ類以降のものが主に使用されている(註-11)。これら杯蓋に宝珠つまみを持ち内面に返りを持つもの一部は初期の瓦窯に於いて軒丸瓦等とともに焼成されている。例えば、京都府幡枝瓦窯址では飛鳥時代とされる軒丸瓦と一緒に(註-12)、また兵庫県高丘古窯址群の中にも飛鳥時代と考えられる軒丸瓦とともに焼成されていることが報告されている(註-13)。これらは藤原京造営前のものであり、軒を持っているが飛鳥時代という1つの時期を与えることができる。今回の調査で出土した鷦尾片は既に単弁を連ねているもので、それぞれの弁を笠で削りあげるなど新しい要素と思われるものをもっている。先の軒丸瓦等よりは後出的であろう。

また第Ⅲ類の須恵器は、岡山県南部地方の小石室を持つ古墳や陶棺内からも出土する例が知られている。

- 註 1. 岡山県教育委員会「東備西播開発有料道路建設区域埋蔵文化財分布調査概要」1972.3
2. 分布調査時以降は「新林古窯址」と呼ばれていたが、かつて時実黙水氏は、桂又三郎「岡山の焼物」の中で『宮崎窯』と報告しており、これにならうと思う。
3. 更谷古窯址は路線上には存在せず、1つ南の谷にあたっている。奥更谷と呼ばれている地点のことである。
4. 潤徳・仁生田遺跡は弥生時代中期頃の土器が採集されている。遺跡の南端部分と思われる所が、予定路線になっており、今回は予備調査を行なう予定であったが、用地買収等が未了であったため調査は行なっていない。
5. 桂又三郎、時実黙水「岡山の焼物」岡山文庫 3. 日本文教出版
6. 西川宏『備前ににおける須恵器の編年的研究—古墳時代—』「岡山県私学紀要」(2) 1965.
西川宏・間壁忠彦「備前の古窯址」「古代の日本」4、中国・四国(角川書店)所収 1970.
先の西川論文もこの中にまとめられている。
7. 吉備考古館、時実黙水等に保管されている。
8. 註-6、西川論文参照。
9. 池畠耕一、葛原克人、『二子窯址の概略』岡山県埋蔵文化財報告 1972.3
10. 田辺昭三、「陶邑古窯址群 1」1966. 平安学園考古学クラブ
11. 奈良県教育委員会編『藤原宮』「奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第25冊」
12. 横山浩一、吉本亮俊、「京都府幡枝の飛鳥時代瓦陶兼窯址」日本考古学会 昭和38年度
大会研究発表レジメ 1963.
「飛鳥・白鳳古瓦」展パンフレット 奈良国立博物館 1968.
13. 大村敦通・伊藤晃、「明石高丘地区埋蔵文化財調査略報」1967. 兵庫県教育委員会

